

家庭科における高齢者問題学習のすすめ方

— 静岡市立M中「ボランティア活動」の教育的効果 —

Lessons of the Aging Society in Homemaking Education

— The Educational Effect of “A Volunteer Activity”

in M Junior High School by Shizuoka City —

小川裕子・吉原崇恵・藤田さゆり*

Hiroko OGAWA, Takae YOSHIHARA and Sayuri FUJITA

(平成元年10月11日受理)

1. 緒言 — 家庭科で高齢者問題を取りあげる必要性 —

我が国の人口高齢化は、欧米の先進諸国に比べると後発ではあるものの、近年急激に進行していることは周知の通りである。65歳以上人口の総人口に占める割合は、1985年に10.3%とはじめて10%を突破したが、今後は1998年には15%を、2012年には20%を各々突破し、最終的には22~23%と全世界でも1, 2を争う高齢国になるという。¹⁾

以上のような高齢化の進展の中で、今日、学校教育、中でも家庭科教育において高齢者問題を取りあげる必要性について、筆者らは次のように考えている。

まず、今日の人口高齢化問題と子ども達との関係について検討すると、以下の4つの問題点が明らかになる。

第一の問題は、今日の子ども達は成人に達すると同時に高齢社会²⁾の担い手となる世代であるという点である。

第二の問題は、第一の問題があるにもかかわらず、核家族化の進行に伴って現代の子ども達の高齢者との交流機会は、他の世代と比較すると激減している点である。

さらに第三には、我が国の現状では、都市化の程度や気候・風土、居住形式等の差異によって地域ごとの高齢者問題の現われ方に大きな差異が認められる³⁾とともに、前述した核家族化の進行に加え子どもの数の減少や女性の社会進出等によって家族・家庭生活のあり様が急激に多様化する等、一人一人の子どもの高齢者問題の認識程度には大きな巾があるという問題がある。

最後に第四には、人口高齢化は「出生率の低下」を最大の要因として進行してきたという事実に示されるように、今日の子ども達は他の世代と比較すると同世代の仲間集団に恵まれていないという問題がある。人間が人間らしく育っていくために、人間同志の関わり合いは最も重要であるにもかかわらず、今日の子ども達は同世代の仲間が少ないというハンディをかかえている。そこで、彼らには高齢者世代と関わることによって人間同志の関わり合う機会を補うこ

* 榛原町立坂部小学校

とが必要だと考える。

さて、以上のように現代の人口高齢化問題と子ども達との関わりを整理するならば、今後早急にすべての国民が高齢者問題について科学的に認識を深めておくことが必要であることがわかる。そのためには、高齢者問題は普通教育、中でも義務教育における教科教育の課題として取りあげる必要がある。筆者らは、高齢者問題について家庭科で取りあげるのが適切であろうと考えている。家庭科では、家庭を中心とした生命の生産・再生産過程についての科学や技術を指導してきた。その際、食物や被服の領域において高齢者の場合を対象にすることもあったが、学ぶ者にとっては、むしろ生活主体のライフサイクル全体を扱う視点で高齢者問題を加えることによって、個々の学習が有機的に関連づけられ生きてくると考えられる。

それでは、高齢化に関して、近年の教育行政はどのように対応しようとしているのであろうか。先の臨時教育審議会(1984～1987年)では、高齢化を国際化、情報化とともに「社会の変化」の1つとして大きく取りあげ、それに対応する教育のあり方について検討することを課題としていた。しかしながら、第1次から第4次に及ぶ答申には、国際化、情報化に対しては独立した章を立てて具体的な方策を述べているのに対し、高齢化に対しては次のような記述がみられるにすぎない。第一は、生涯学習体系への移行の必要性を強調する根拠である『新たな学習需要の高まり』の1つとしての位置づけである。第二には、生涯学習体制整備の一環で『社会教育諸機能の活性化』の一方策として、ボランティア活動の振興が記されている点である。⁴⁾

また、1989年3月に発表された学習指導要領においては、高齢化に関わって次のような改訂がみられる。まず、教科に関しては高等学校家庭科で、選択必修の3科目「家庭一般」、「生活技術」、「生活一般」で共通して、高齢者の生活に関する内容が重視され、さらに、選択科目として「家庭看護・福祉」が新設されている。そして、道徳では高齢者や祖父母に尊敬と感謝の念を育てること、特別活動では学校行事の項で、「勤労・生産的行事」が「勤労生産・奉仕的行事」へと改訂されている。⁵⁾

さらに、地元静岡県では、高齢者問題学習の一環として位置づけたものではないが、すでに1978年から全国に先がけて「高校生の社会参加促進事業」等が実施されている。そこでは、今日の青少年の自己中心的で他人への思いやりに欠ける実態をとらえ、ボランティア活動を通して自立性や社会性を培っていかうとしている。⁶⁾

結局、筆者らは、今日、高齢者問題について小・中・高等学校の家庭科教育における一貫したカリキュラム編成を急務と考えている。家庭科における高齢者問題についての学習内容は、「高齢」それ自体の自然科学、社会科学両面からの理解はもちろん、衣・食・住、家族関係、さらには介護について含むことになろう。また、家庭科では実践的・体験的学習が独自の方法とされるが、高齢者についての学習方法もまた、開発されなければならない。

2. 本研究の目的

本研究では、究極的には小・中・高等学校の家庭科教育における高齢者問題についての科学的な認識を高めるための学習のすすめ方について明らかにすることを目的としている。本稿はそのための第一段階の報告であり、静岡市立M中で行われている「ボランティア活動」の教育的効果について、それを前述のような高齢者問題についての学習の一環として位置づけながら明らかにしようとするものである。

3. 本研究の方法

(1) 静岡市立M中における「ボランティア活動」

野上芳彦によれば、ボランティアとは、①自発的意志による、②民間有志である、③無償である、④プロではない等の一般的な特性をもつものである。⁷⁾ 本研究で取りあげるボランティアは、学校教育の一環であるという意味で、すでに本来のボランティアとは異なる。しかし、学校におけるボランティア的な活動については、まだ明確な概念が確立したとはいえないため⁸⁾、本稿では、一つの事例という意味でカッコを付け、静岡市立M中「ボランティア活動」とした。さて、静岡市立M中「ボランティア活動」は次のようなものである。

M中は、静岡市の中心部からバスで約30分の市街地周辺地域にあり、校区内には公営住宅団地を有している。4、5年前、生徒達の一時荒れた時期に、教師達が校区内にあるR特別養護老人ホーム（以下、Rホームと略す）へのボランティアを呼びかけたことがキッカケとなり、「ボランティア活動」が始まった。その後は、M中生徒会の一委員会としてボランティア委員会が設けられ、そこを主体として活動が行われている。

すなわち、各クラスのボランティア委員（2名）は、年度当初に、クラスの全員にRホームへボランティア参加希望を募る。次に、こうして集まった希望者とボランティア委員全員は、あらかじめ当該年度内の毎週日曜日に4～10名程度づつ活動日を割り当てられる。結局、割り当てられた日に参加できる生徒が、Rホームへ直接出かけるという。

M中生の「ボランティア活動」の仕事内容については、Rホームの職員の話によると「できるだけお年寄りと話をしたり、手伝ってあげるなど、直接接する機会となるもの」が重視されるという。具体的には、話相手、食事介助、居室の清掃、散歩の付添い等が中心である。

(2) 調査の概要

M中「ボランティア活動」に関して、その高齢者問題学習の一環としての教育的効果について明らかにするため、M中の生徒全員を対象としてアンケート調査を実施した。調査は、クラス単位で、ホーム・ルームの時間に実施した。調査票の配布数、回収数は、表1に示す通りともに計961であり、回収率は100%であった。調査は1988年11月に実施した。

表1 調査票の配付・回収数（回収率 100%）

	男子	女子	計
1年生	175	141	318
2年生	169	148	318
3年生	177	148	325
計	521	437	961

4. 調査の結果と考察

(1) 祖父母との関係

まず、調査対象者の祖父母との関係についてみる。図1の上段の図に示すように、M中生のうち祖父母と現在同居しているのは約2割であり、過去に同居していた者を合わせても4割に満たない。これは、前述したようにM中校区は、市街地周辺地域であるため比較的新しい住宅地であること、また、公営住宅団地を抱えているため一戸当りの住宅規模が比較的小さいことが影響していると思われる。

他方、M中生全体のうち8割強には別居している祖父母がいる。しかし、彼らの居住地は約半数まで静岡市内であり、県内を含めると8割に達する等、比較的行き来しやすい関係にあることがわかった。すなわち、過半数は別居の祖父母と年5回以上会っており、しかもその約半数は年間20回を超えている。逆に、一年間全く会わなかったという生徒は、わずか1.5%にすぎない。

(2) 「ボランティア活動」への参加状況

次に、図2には「ボランティア活動」への参加状況を示した。M中生全体のうち「ボランティア活動」に参加したことがあるという者は、3割弱である。ただし、この値には性差が著しく、男子では12.9%、女子では46.7%と大きな差がある。前述したような「ボランティア活動」であれば、その参加状況には学年差もあると予想されるが、これについては各学年とも3割前後とあまり差はなかった。これは「ボランティア活動」に始めて参加するのは、多くの場合に1年生の間であることを反映していると考えられる。

「ボランティア活動」への一人当たりの参加回数は、「1回」が約4割強、「2回」とそれ以上が6割弱を占める。

また、「ボランティア活動」参加について、(1)でみた祖父母との同居経験の有無によって比較すると、図2の下2つの図に示すような結果になる。すなわち、祖父母との同居経験の有る者より無い者の方が、「ボランティア活動」への参加の割合が2倍も高く、35.0%を占める。

(3) 「ボランティア活動」に参加して感じたこと

「ボランティア活動」に参加することによってM中生が感じたことを明らかにするために、本研究では次のような手続きを経た上で、調査票の設問を作成した。

まず、静岡県立F高等学校で夏季休業中に実施している「ボランティア体験学習」（地域の様々なボランティア活動に各自参加するというもの）についての感想文（自由記述）を借用し、それを分析した。その結果、生徒達の感想の内容は、次の5つの項目にまとめることが出来た。「高齢者について」、「高齢者との接し方」、「ボランティア活動について」、「やさしさ、思いやり」、「自分の生き方」である。

さて、これらの項目にまとめられた個々の具体的な感想には、大まかに、高齢者やボランティアに対して、受容し肯定的であるものと、逆に拒絶的、否定的であるものの2とおりの内容

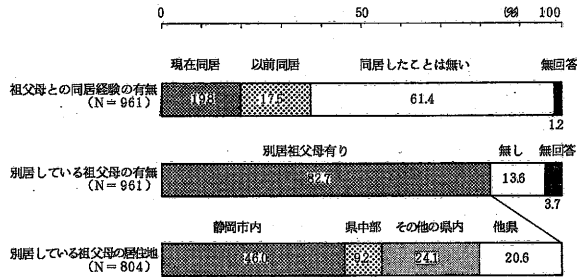


図1 祖父母との関係

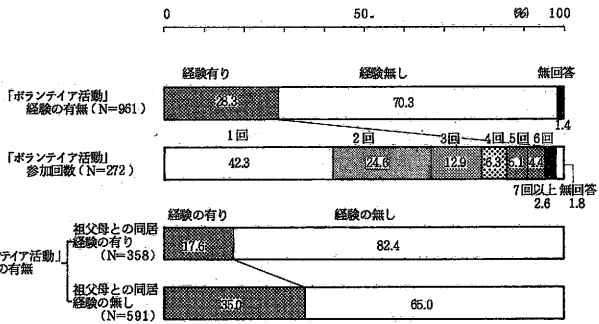


図2 「ボランティア活動」への参加状況

が含まれている。「高齢者について」に関するものでは、受容しようとする感想として「みんな一生懸命生きている」、「みんな同じ人間だと思った」等があり、拒絶的・否定的なものとして「したいことも思うようにできなくて、気の毒だと思った」等がある。「高齢者との接し方」では、受容的なものとして「相手の立場に立って接することが大切だと思った」、「世話のし方がわかった」等があり、拒絶的なものとして「老人と接するのは難しく、もう接したいとは思わない」等がある。また、「ボランティア活動について」では、受容的なものとして「たいへんだったが、楽しかった」等があり、拒絶的なものとして「自分には向かないし、やっていく自信もない」等がある。「やさしさ、思いやり」については、受容し肯定する内容としては「思いやりや心配りが大切だと思った」等があり、否定的な内容としては「精神的な面では別に影響を受けたことはない」等がある。最後に、「自分の生き方」については、受容しようとするものとして「私もかんばらなければ、と思った」等が、否定的なものとして「自分は年をとりたくないと思った」等がある。

調査票では、以上の5項目について、先に例を述べたような、受容し肯定的なものや拒否的・否定的なもの、具体的な内容を5、6例ずつ用意しておき、その中から回答者の感想に最も近いものを1つずつ選んでもらうことにした。もちろん、

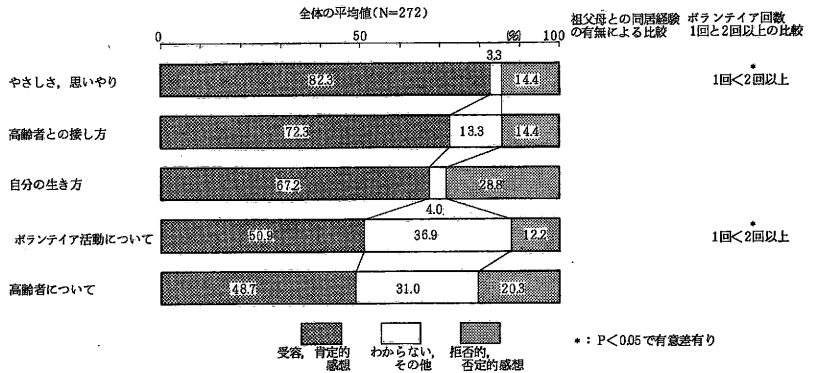


図3 「ボランティア活動」に参加して感じたこと

ここでの受容し肯定的な内容と拒絶的・否定的な内容は、単純に前者が後者よりすぐれたものであると決めつけることは出来ない。例えば、「老い」には弱く醜い、否定したくなる面が多分に含まれることが事実であり、それを知ることは、近い将来、「老い」をより深く理解することにつながるからである。ここでは、M中生が「ボランティア活動」に参加して感じたこととして、「高齢者について」等5項目に関して受容と拒絶をどの程度の割合で感じたのかについて明らかにする。

図3には、以上の結果について、受容し肯定する内容を選択した割合の高い項目を上から順に並べている。まず、「やさしさ、思いやり」が最も高い。次いで「高齢者との接し方」という方法に関すること、そして「自分の生き方」が続く。ただし、「自分の生き方」については、他方で、拒絶的・否定的な内容を選んだ割合が最も高いことも注意する必要がある。「ボランティア活動について」や「高齢者について」の理解には、受容し肯定する内容を選択した割合は最も低い。また、「高齢者について」は、拒絶的・否定的な内容を選んだ割合がやや高い。

さらに、以上の結果に関して、図3の右側には、①祖父母との同居経験の有無と②「ボランティア活動」参加回数の1回と2回以上で各々比較し、カイ自乗検定による有意差の検定を行った結果を示している。この結果、「ボランティア活動」で得たものについて、祖父母との同居経験の有無による有意な差は認めることは出来なかった。「ボランティア活動」への参加回数による差は、「やさしさ、思いやり」、「ボランティア活動について」に関して、1回より

2回以上の経験者が受容・肯定的な感想をより多く抱いていることがわかった。

これらのことから、「ボランティア活動」はM中生に「やさしさ、思いやり」といった精神的な面で強く影響を与えていることがわかった。これに対して、「高齢者について」の理解をすすめる点では、十分なものとはいえないようである。

(4) 「ボランティア活動」と高齢者のイメージ

続いて、「ボランティア活動」の経験が、高齢者に対して抱くイメージにどのように影響しているのかに注目する。調査では、高齢者のイメージを表わす言葉を、図4の左側に示す通り12項目用意し、各々について

「そう思う」、「思わない」、「どちらでもない」の中から

該当するのを1つ選んでもらった。図4には、調査対象全体で「そう思う」と答えた割合の高い項目から順に並べている。

「色々なことを知っている」「やさしい」、そして「ほがらか」といった肯定的なイメージが最も強いことがわかる。しかし、その次には「経済的に豊か」「明るい」とともに、「病弱」「頑固」「孤独」という否定的イメージも強くなっている。「疑い深い」「自己中心的」「短気」「暗い」は最も低い値を示すイメージである。

さらに図4の右側には、高齢者のイメージが、祖父母との同居経験や「ボランティア

活動」経験の有無によって差があるかどうかを示している。この結果によれば、祖父母との同居経験と「ボランティア活動」の経験では、その有無によって有意差の生じるイメージが異なることがわかる。同居経験の有る場合に、高齢者の性格に関する「短気」「疑い深い」「頑固」といったイメージが、経験の無い場合より強く、逆に、身体状況について「病弱」とするイメージは弱くなっている。これに対して、「ボランティア活動」の経験では、有る場合により強いイメージが「孤独」であり、逆に無い場合により強いのが「経済的に豊か」というイメージである。

以上の結果から高齢者のイメージを形成することに関わって、同居経験と「ボランティア活動」経験は大きく異なる影響を与えることがわかる。高齢者が生徒にとって家族の一員である

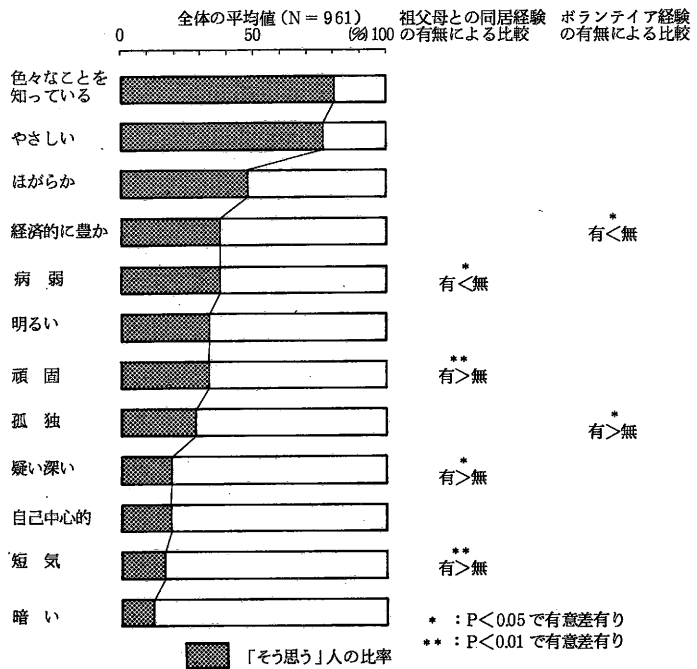


図4 高齢者のイメージ

か、他人であるか、さらに、高齢者と関わる時間の大きな違い等が影響しているのであろう。この中で、「ボランティア活動」で高齢者を客観的に知る機会を得ることによって、高齢者の孤独の問題や経済的な問題に気が付くということは、大変重要なことである。

(5) 「ボランティア活動」と高齢者問題学習意欲

最後に、高齢者問題に関する学習意欲についてたずねた。M中生全体では図5に示すような結果である。高齢者問題について「学習したい」とする者が56.6%と過半数を占めるが、同時に「学習したいとは思わない」という者も34.2%いる。

以上の結果については、さらに、学年別、性別、同居経験の有無別、「ボランティア活動」経験の有無別、回数別に比較し、各々の間に有意差があるかとかをカイ自乗検定によって算出した。その結果を表2に示す。まず、高齢者問題に関する学習意欲は、学年別では低学年である程、性別では男子より女子で高い。次に、この学習意欲は、祖父母との同居経験の有無では差がないのに対して、「ボランティア活動」経験の有無によって有意差が認められる。ただし、「ボランティア活動」経験の回数による差はない。

以上の結果から、先にみた高齢者のイメージと同様に学習意欲に関しても、「ボランティア活動」の経験は同居経験とは異なる重要な意味をもつことが明らかである。

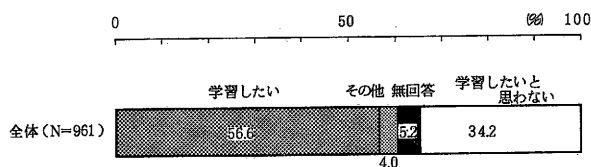


図5 高齢者問題学習への意欲

表2 高齢者問題学習への意欲に関する有意差 *:P<0.05で有意差有り ***:P<0.001で有意差有り

学年別の比較	性別の比較	祖父母との同居経験の有無による比較	ボランティア経験の有無による比較	ボランティア回数1回と2回以上の比較
1年>2年>3年	男子***<女子		有*>無	

5. 結 語

家庭科における高齢者問題学習のすすめ方について明らかにするため、本研究では、生徒会の主催する「ボランティア活動」の教育的効果に関する調査を実施した。調査対象は、地方都市郊外に所在する公立中学校の全生徒であり、彼らの祖父母との関係は、同居率こそ約2割に満たないものの、別居であっても多くの場合に交流を続けている状況にある。

調査結果の主たる知見は以下の通りである。

- ① 「ボランティア活動」への参加状況は、女子で約半数、男子で約1割強と性差が著しい。また、始めて「ボランティア活動」に参加するのは、多くの場合、1年生の時期である。祖父母との同居経験との関係でみると、同居経験は無い場合の方が有る場合より「ボランティア活動」の参加が高い。
- ② 「ボランティア活動」に参加することによって、やさしさ、思いやりといった心情的な面の重要性を感じた者が多い。ただし、他方で、高齢者についての十分な理解には至らず、自分とは違うものといった感想を持った者も少なくない。

- ③ 高齢者のイメージに関して、祖父母との同居経験と「ボランティア活動」の経験では、全く異なる影響を与える。同居経験は、高齢者の性格に関する否定的イメージ（「短気」、「頑固」等）を強くする。「ボランティア活動」の経験は、高齢期の基本的な問題とされる経済面や孤独の問題に対するイメージを強める。
- ④ 高齢者問題についての学習意欲は、性別では男子より女子、学年では低学年程、そして「ボランティア活動」経験の有る生徒の場合に、より強い。祖父母との同居経験による差は認められなかった。

以上の知見から、生徒会主催による「ボランティア活動」は、教科教育において高齢者問題に関する科学的な認識を得るための学習にまで発展させ得る可能性をもつものであることがわかった。ここでは、さらに、家庭科教育の中での高齢者問題学習において、M中で実施されているような「ボランティア活動」をどのように位置づけるかという点について提案する。

「ボランティア活動」は、家族の一員ではない他人の高齢者に生徒達が直接出会う機会である。そのため、生徒達は高齢者のかかえている問題をより客観的に把握することが可能であり、問題意識を強く抱くようになる。以上のような意味で、「ボランティア活動」を、高齢者問題学習の一番最初に少なくとも1回体験させることは、大変有効であろう。「ボランティア活動」を体験する学年は、中学生期では1年生が最も適切である。

しかしながら、「ボランティア活動」の体験に止まるならば、やさしさや思いやりといった心情面に流れてしまって、一部には高齢者とその問題を自分とは関係のないこととしてとらえる傾向も認められるため、その後の学習の展開のあり方が一層重要な意味をもつことになると考えられる。

また、「ボランティア活動」への参加に対する性差が著しいが、高齢者問題は男女を問わない問題であるため、共学により両性がお互いに刺激し合うことが重要であろう。

今回の調査では、高齢者のイメージや高齢者問題学習意欲について、祖父母との同居経験と「ボランティア活動」経験各々の有無の間での比較は行なったものの、相互にクロスした比較（例えば、祖父母と同居し、かつ「ボランティア活動」の経験もある者と、同居しているが「ボランティア活動」の経験はない者間で比較する）は行っていない。それは、今回の調査対象者では、祖父母と同居している者が少数であったためである。この点は今後の課題である。

また、家庭科教育における高齢者問題全体のカリキュラム構成と、その中での「ボランティア活動」の名称についても、今後検討していきたい。

謝 辞

最後に、本研究をすすめるにあたり、調査にご協力下さいました静岡市立M中学校の校長先生はじめ諸先生方、そして全生徒の皆様、さらに、生徒のボランティア感想文をみせて下さった静岡県立F高校の小杉よし子先生に、心から感謝いたします。

註

- 1) 厚生省人口問題研究所『日本の将来人口新推計について』（昭和61年8月暫定推計）p. 9
- 2) 高齢社会とは、65歳以上人口の総人口に占める割合が14.0%以上の社会をいう。ちなみに、

高齢化社会とは、この値が7.0%以上14.0%未満の社会をいう。

- 3) 坂寄俊雄「人口高齢化がよびかける変革 — 区市町村の高齢化を中心にして —」新日本出版社『経済』1988.10 p.158~192
- 4) 文部省『文部公報』昭和60年6月27日付, 昭和61年5月27日付, 昭和62年4月9日付, 昭和62年8月14日付
- 5) 文部省「幼稚園教育要領及び小・中・高等学校学習指導要領の改善の要点」『文部公報』平成元年2月11日付
- 6) 鈴木義男「ボランティア学習」静岡県出版文化会編集『教師の広場』季刊80号, 1989年6月, p.6~11
- 7) 野上芳彦『たった一人でも世の中を変える ボランティア活動入門』柏樹社 1974年5月
- 8) 静岡県教育委員会では、1989年度より、学校教育現場での「ボランティア活動」を特に区別して「ボランティア学習」という用語を用いている（『静岡新聞』1989年6月21日）